

横浜市インフルエンザ流行情報 9号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

インフルエンザ流行警報が発令されました。

【概況】

横浜市全体の第3週(1月15日～21日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、**56.09**となり、流行警報発令基準値(30.00)を上回りました。

年齢別では、15歳未満の報告が全体の約7割を占めており、また、学級閉鎖等の報告が、第3週は小学校・中学校を中心に141件、患者数2,330人と、急激に増加しています。保育園での集団発生の報告も増えており、お子さんがいるご家庭での感染予防が重要です。

また、病院や高齢者施設等での集団発生の報告も続いています。各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を徹底しましょう。

迅速診断キットの結果は、第3週では **A型 33.1%**、**B型 66.6%**と、さらにB型の割合が増えており、流行初期と逆転しています。

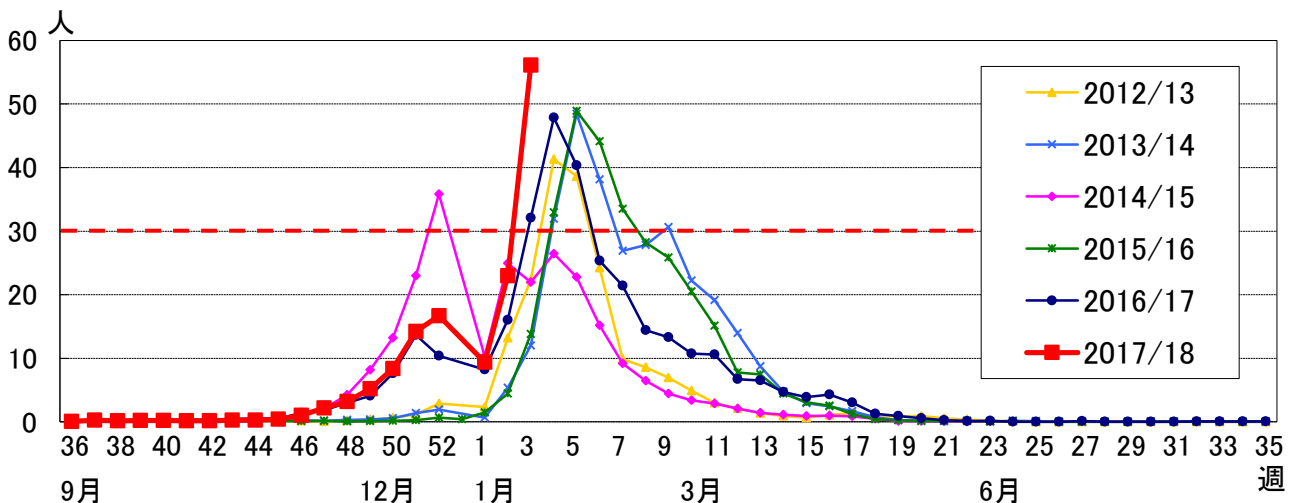
インフルエンザの本格的な流行期に入ったため、正しい手洗い^{※2}等の予防、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策^{※3}が重要です。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

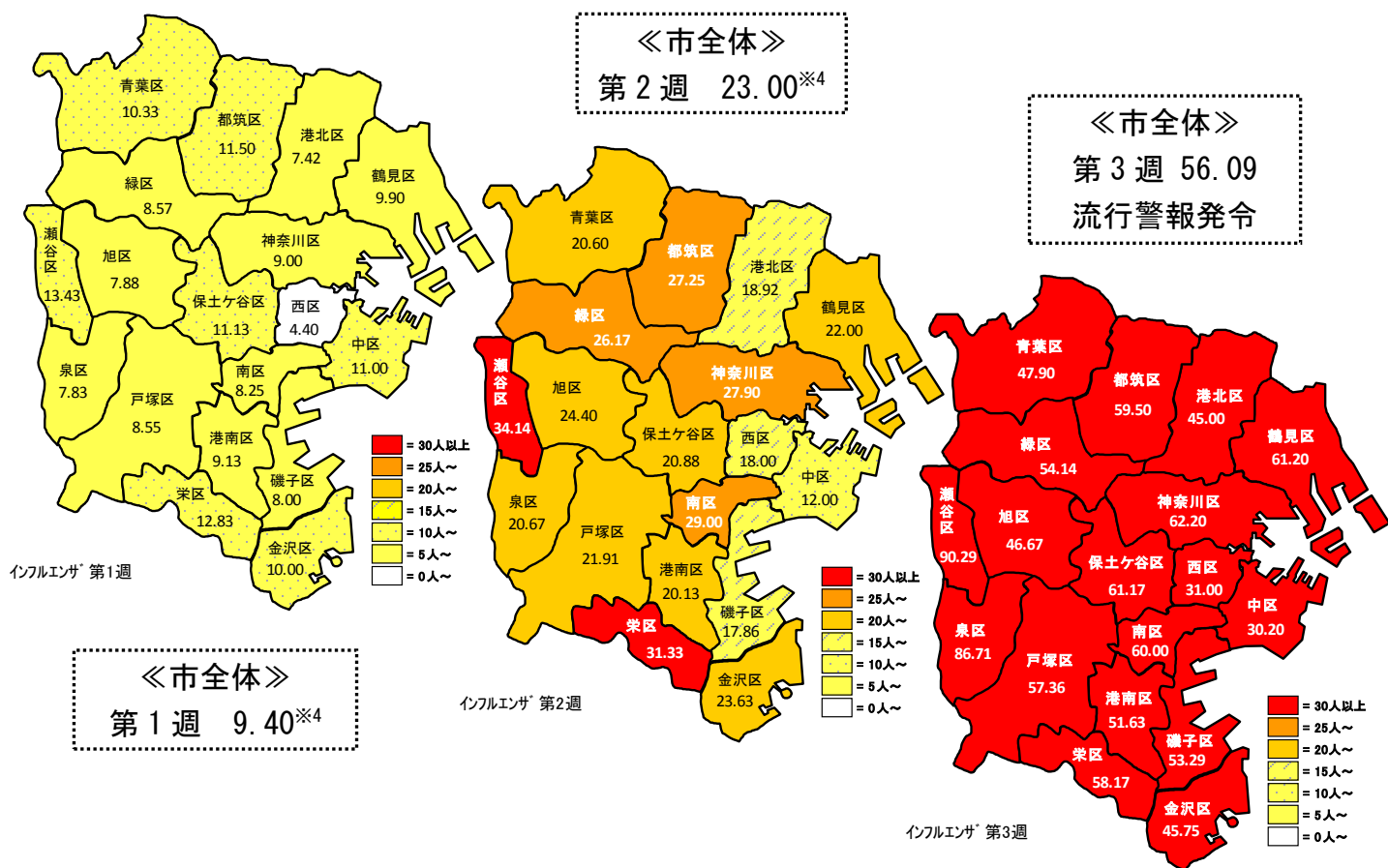
※2 [横浜市保健所ホームページ](#)(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご活用ください)

※3 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第3週(1月15日～21日)で、56.09となり、流行警報発令基準値(30.00)を上回りました。昨シーズンも第3週にて警報発令されていますが、定点あたりの報告数は昨シーズンを上回っています。



2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



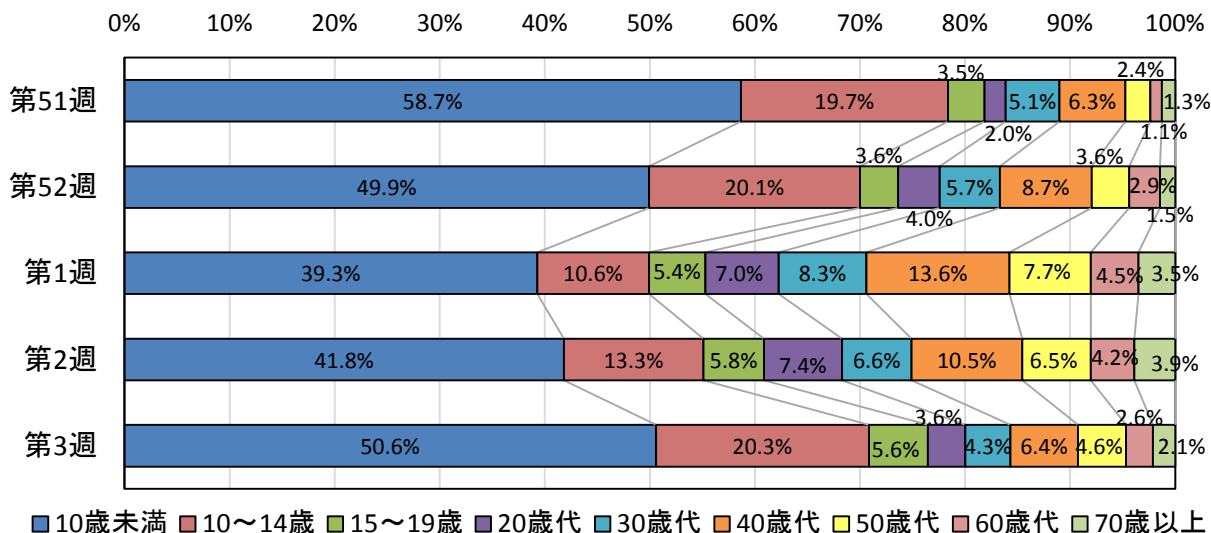
※4 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

第 3 週にて、市内全体で定点あたり 30.00 を超えたため、流行警報が発令されています。流行警報は、解除基準値（10.00）を下回るまで続きます。

昨シーズンは第 3 週に定点あたり 32.23 にて流行警報が発令され、第 12 週（2017 年 3 月 20 日～26 日）に解除されています。

3 年齢層別集計: 第 3 週の患者年齢構成は、10 歳未満が全体の 50.6%、10 歳以上 15 歳未満が全体の 20.3%を占めており、15 歳未満が全体の 70.9%を占めています。また、60 歳以上は全体の 4.7%となっています。冬休み期間のため小児の感染が減少していたものの、授業開始により小児の感染が増加した可能性があります。

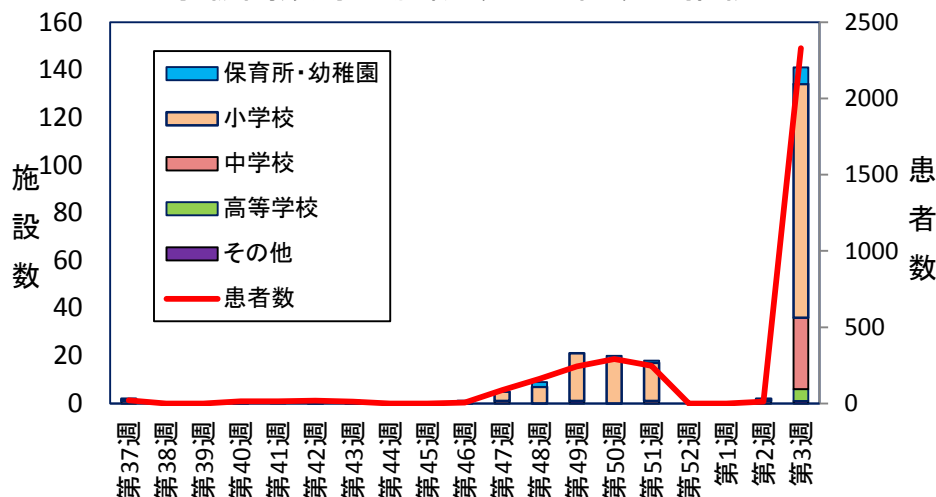
年齢層別患者割合



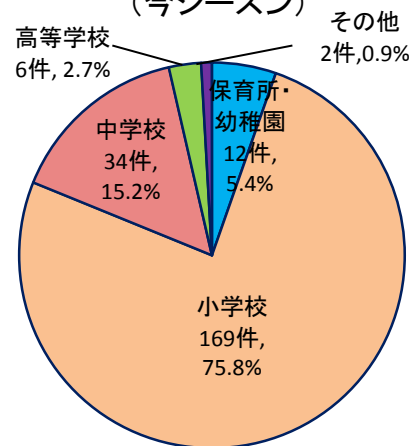
4 市内学級閉鎖等状況:第3週は学級閉鎖等の報告が急増し、141件(学年閉鎖18件、学級閉鎖123件)の報告がありました。内訳は、保育所・幼稚園7件、小学校98件、中学校30件、高等学校5件、その他1件です。

今シーズンの第3週までの報告は累計223件、患者数は延べ3,458人で、施設の割合は、保育所・幼稚園5.4%、小学校75.8%、中学校15.2%、高等学校2.7%、その他0.9%となり、中学校からの報告の割合が増えています。

学級閉鎖等の施設数と患者数の推移



学級閉鎖等の施設の状況 (今シーズン)

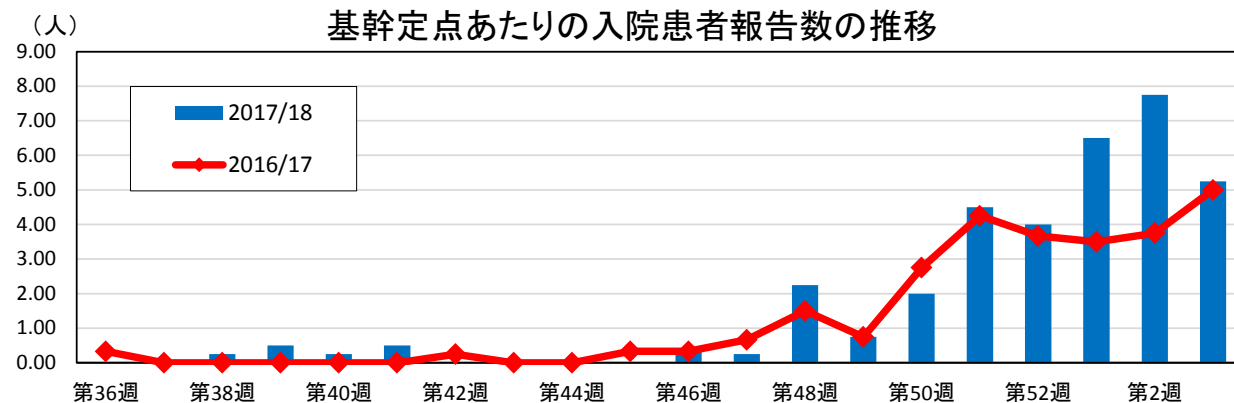


5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※5}におけるインフルエンザ入院患者は、第3週は21人の報告があり、累計132人^{※4}となりました。うち、15歳未満が34人、60歳以上が79人となっており、小児と高齢者の報告が多くなっています。

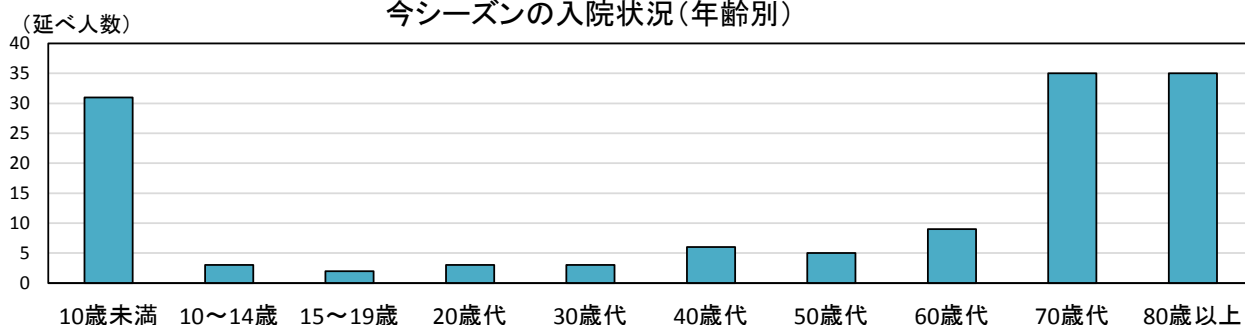
入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第3週では7人の報告がありました。

※5 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

基幹定点あたりの入院患者報告数の推移

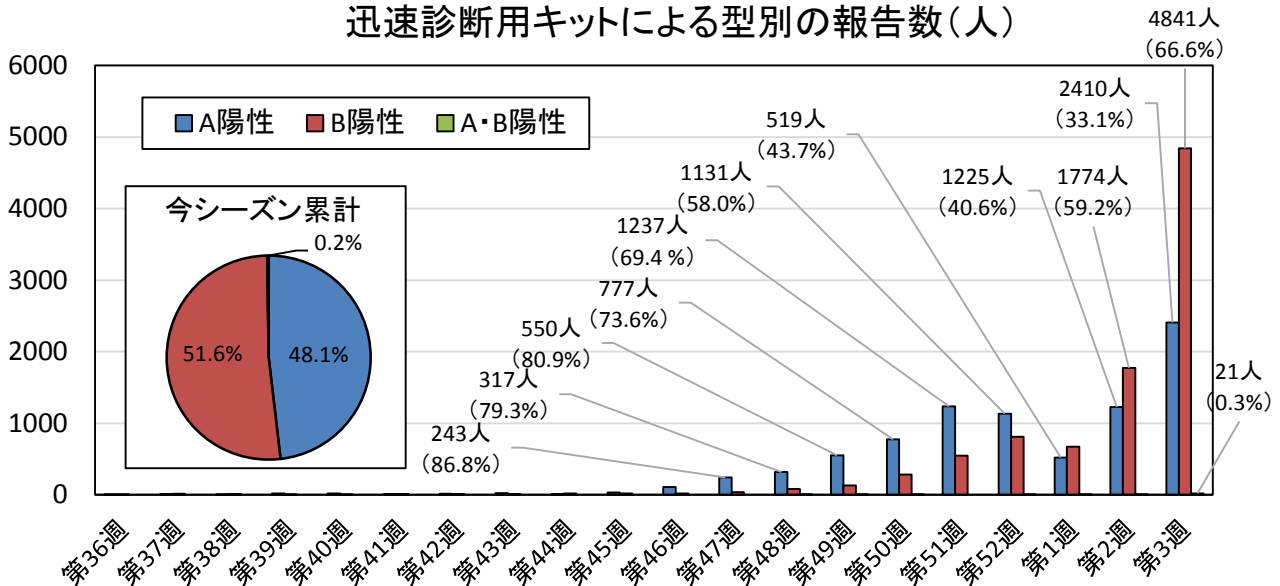


今シーズンの入院状況(年齢別)



6 迅速キット結果:これまでの経過ではA型が多く報告されてきましたが、第50週頃よりB型の割合が増え始め、第1週で逆転しています。第3週の迅速キットの結果では、A型33.1%、B型66.6%、A・B型ともに陽性0.3%と、B型の割合がさらに増加しています。今シーズン累計は、A型48.1%、B型51.6%、A・B型ともに陽性0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{※6}からAH1pdm(38株)、AH3(22株)、B(山形系統)(46株)が分離・検出されており、主にAH1pdmとB(山形系統)が分離・検出されている状況です。なお、Bビクトリア系統は市内にて分離・検出されていません。

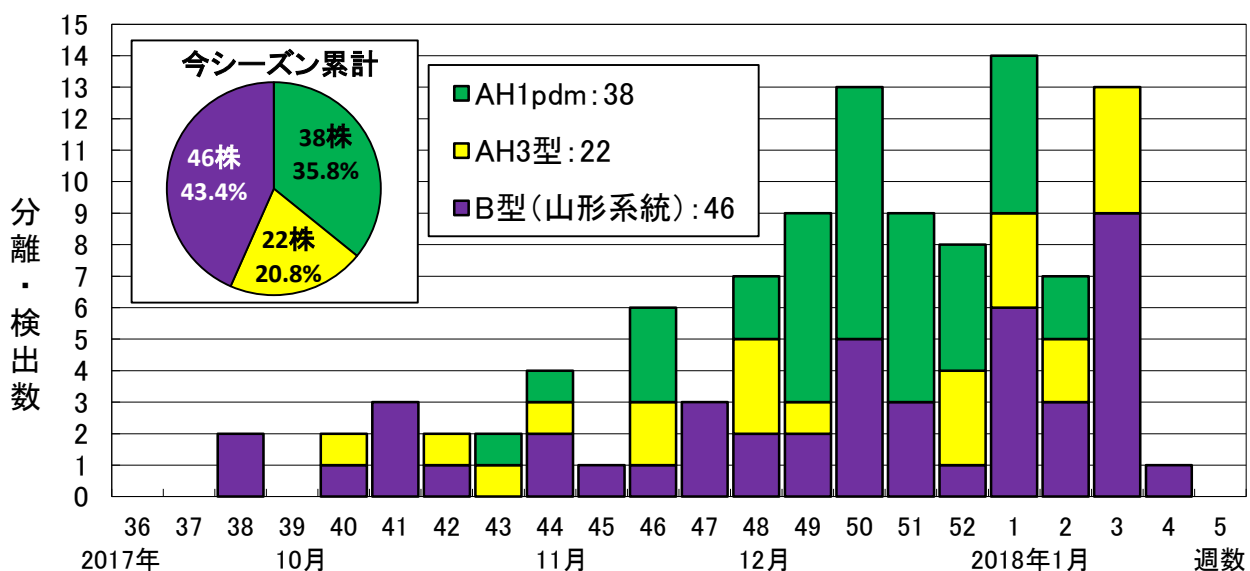
全国でも、主にAH1pdmとB(山形系統)が分離・検出されています^{※7}。

※6 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に17か所あります。うち、インフルエンザについては12か所にて採取されています。

※7 [週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数\(国立感染症研究所、1月19日作成\)](#)

市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

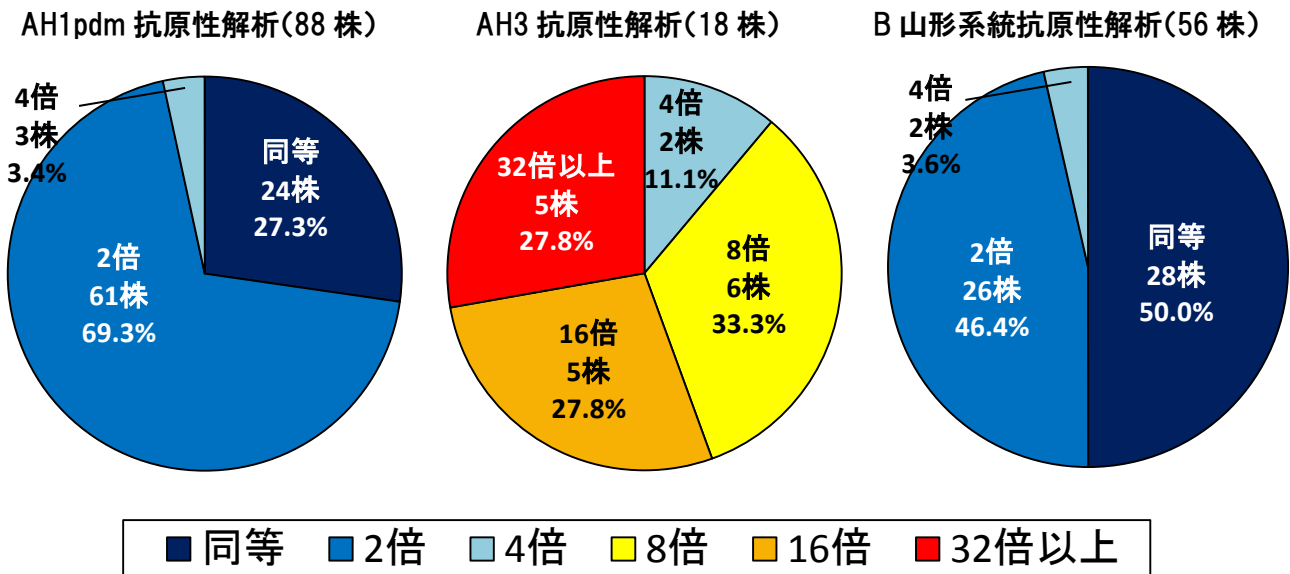
(2018年1月24日現在)



8 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した 162 株、1 月 24 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、AH3 は、18 株のうち 16 株が 8 倍以上で、AH1pdm(88 株)と B 山形系統(56 株)は、すべて 4 倍以内となっています。これは、AH3 の 94%が 8 倍以上で、AH1pdm および B 山形系統のすべてが 4 倍以下であったという国立感染症研究所の結果^{※8}と矛盾しないと考えられます。

※8 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2017 年 12 月 28 日\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析



インフルエンザウイルス(AH3 型)
の電子顕微鏡写真(3 万倍)

撮影:
横浜市衛生研究所



※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)
全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9279
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2442